

Bryn Roberts & Lage Lund

[Profile]

ブリン・ロバーツ Bryn Roberts : piano



カナダ出身。

モントリオールにあるカナダの名門マギル大学に入学。

フレッド・ハーシュに師事し、1998年に優秀な成績で卒業する。

卒業後はモントリオールを中心に演奏活動始める。

2000年、メイナード・ファーガソン・ビッグバンドのアメリカ国内やイギリスツアーに参加した後、ニューヨークに仕事の拠点を移す。

刺激的で多様な音楽が交差する状況下でリーダー、サイドマンとしての経験を重ね、説得力のある演奏と作曲はニューヨークのジャズシーンでもすぐに注目される。2005年、カナダ出身のSAX奏者シェーマス・ブレイクが参加したリーダー作『Ludlow』をFSNTから発表、大きな話題となる。

また、jazzやimprovised musicの他にシンガーソングライターの世界で多くのアーティストとのコラボレーションを続けている。

2008年からはDar Williamsの伴奏を務め最新アルバム「Emerald」の制作に参加し演奏の他に挿入曲“New York is a harbour”の作曲も手掛ける。

また、ソウル歌手/ウィリアムベル、グラミー賞受賞者のロザン・キャシュ、ジョン・レヴェンタール等コンサートにも参加している。

主な共演者にシェーマス・ブレイク、クリス・チーク、クリス・ポッター、ラーゲ・ルンド、ピクター・ルイス、ケンドリック・スコット等、ニューヨークのトップミュージシャンも多く、グラミー賞受賞者のAlan Ferberが率いるNonetの元メンバーであり“Scenes from an Exit Row”, “The Compass”, “Chamber Songs” and “Roots and Transitions”のレコーディングに参加している。

自身のリーダー作『FABLES』ではシェーマス・ブレイクがソプラノサックスに持ち替えメロディアスな非4ビート曲で印象的な演奏を披露し、活気あふれるドラミングのジョナサン・ブレイクをフィーチャーして大きな反響をよんだ。最新作はLage LundとのDuo『Nightsong』で印象的な演奏を披露している。今ニューヨークで最も期待されるファーストコールのピアニストの一人である。

ラーゲ・ルンド Lage Lund : guitar



1977年、ノルウェーのシェーエン出身。

13歳頃からギターを始めると、3年後には自分のバンドで地元のクラブで演奏するようになっていた。

ハイスクール卒業後、奨学金を得て渡米してパークリー音楽院で学んだあと、ニューヨークに移ってジュリアード音楽院に入学。

新設されたジャズ・ギター科の最初の生徒としてピーター・バーンスタインからも教えを受けた。

そして、2005年に開催されたセロニアス・モンク・コンペティションで優勝し、翌2006年に日本のポニー・キャニオンから1作目『Romantic Latino』でリーダー・デビューを果たすと、2007年に2作目『Standards』も残した。

続いてクリス・クロス・レーベルから2008年に3作目『Early Songs』、2010年に4作目『Unlikely Stories』、スモールズ・レーベルから2011年のステージの模様を収録した5作目『Four Live At Smalls』を、再びクリス・クロスから2013年に6作目『Foolhardy』、2015年に7作目『Idlewild』、さらに2016年にはピアノのブリン・ロバーツとのデュオ・アルバム『Nightsong』もリリースした。

その一方で、マーク・アイシャム、シェーマス・ブレイク、マーク・ターナー、ウィル・ヴィンソンなど共演は多数に上る。

来歴はこれまで8回。2010年1月でのサックスのダヴィッド・サンチェス・グループを皮切りに、翌2011年9月には自身のトリオを率いて、2012年5月には自身のカルテットを率いて日本ツアーを敢行。

また、2012年12月にはマリア・シュナイダー・オーケストラの初来日公演にも帯同し、2013年秋には再び自己のトリオを率いて、さらに同年12月にはマリア・シュナイダー・オーケストラ2度目の来日公演にも参加。2014年6月にはアリ・ホーニグ・トリオ、2014年秋にはラーゲ・ルンド・トリオで日本を回っている。

故ジム・ホールの流れを汲むスタイルとしては、ピーター・バーンスタインなどが上がるが、その次の世代の中では最も期待されているギタリストと評されている。